

令和元年6月18日現在

機関番号：32689

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13211

研究課題名(和文) 西欧古代と中世の文学史における連結点としてラテン語詩人クラウディアヌス

研究課題名(英文) Latin Poet Claudian as a Connector of Ancient and Medieval Ages in the History of the European Literature

研究代表者

宮城 徳也 (Miyagi, Tokuya)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：90278789

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：5世紀初頭にイタリアで宮廷詩人として活躍したクラウディウス・クラウディアヌスの作品群は、政治的・軍事的内容の作品、物語的叙事詩、小品群の3つに分けられ、キリスト教が既に国教となり、東西分裂したローマにおいて、異教的文学伝統を作品の中に活かし、彼以後の、中世文学の先駆けとなるキリスト教詩人たちの先例となった。本研究は、文学史において、彼が果たした古代から中世への連結点としての枠割を、3つの作品群と先行する古典文学の関係に注目し、宮廷詩人として権力者を称え、政権を肯定する役割を果たしながら、文学作品としての水準を保持し、後世の詩人たちの手本となり、中世キリスト教文学への道標となったことを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本における西洋古典文学研究において、見過ごされがちだった古代末期のラテン語文学を代表する詩人クラウディウス・クラウディアヌスに注目し、「最後の異教詩人」と理解されがちなこの詩人が、古代文学の伝統に根付く様々なテーマを同時代に応用する作品を多く遺したことによって、彼以降のキリスト教詩人たち、ひいては中世ラテン文学の詩人たちの手本となり、西欧の文学伝統を後世に伝えるのに極めて重要な役割を果たしたことを明らかにすることによって、古代宗教(いわゆる異教)とキリスト教、古代と中世が画然と分けられ、古代文学の伝統はルネサンス期に復活したという印象が持たれるが、こうした通俗的理解を修正する役割を果たした。

研究成果の概要(英文)：Claudian acted as a court poet of fourth century Western Roman Empire. His works are divided into three parts, works on the political issues, narrative epic and short poems. In the first part, Claudian praised Theodosius, Honorius and Stilicho, using traditional topics and themes of the classical Roman Literature. In "the Rape of Proserpina", narrative epic, he applied an allegorical method to the various themes borrowing from Virgilian epic in the first century B.C. In short poems he treated many literary materials of the tradition of the classical literature and handed over them to the poets and writers in the Christian late Antiquity and Medieval Age. My research and treatises clarified his important position in the history of the literature in the Western Europe.

研究分野：西洋古典学

キーワード：クラウディウス・クラウディアヌス ローマ文学 叙事詩 ラテン語 古代末期キリスト教文学 祝婚歌 模倣の中の創造 文学と政治

### 1. 研究開始当初の背景

以前から古代後期の詩人クラウディウス・クラウディアヌス（以下、クラウディアヌス）に関心があり、彼の「ホノリウスとマリア」の祝婚歌を古代文学の伝統に位置付ける論文も発表し、一方で、やはり悲劇『メデア』で合唱隊に祝婚歌を歌わせた1世紀の哲学者セネカの研究を続けており、祝婚歌の伝統という一つの観点からでも、ホメロスに始まる古代叙事詩、ギリシア悲劇、ヘレニズム文学、ウェルギリウスを頂点とする古典ローマ文学から、セネカを経由した紀元後古代のラテン文学の展開について、単なる文学史的知識ではなく、個々の作品の精読、研究を通して、一定の理解を得たいと考えていた。

その一例として、セネカより僅かに時代がくだるスタティウスが開拓した叙事詩的（物語的）祝婚歌の伝統に注目し、300年後に「ホノリウスとマリアの祝婚歌」においてその伝統を復活したクラウディアヌスのラテン詩人として重要性を再認識した。

京都大学学術出版会の「西洋古典叢書」において、クラウディアヌスの全作品の翻訳者に指名されたこともあり、「ホノリウスとマリアの祝婚歌」が皇帝と権力者の娘の結婚を扱った政治的な主題を内包していることもあり、クラウディアヌスが多数詩作した、皇帝テオドシウス、将軍スティリコ、皇帝ホノリウスを称えるための政治的、軍事的主題の作品群を精査する必要を感じていた。

このような問題意識を前提に、科研費の挑戦的萌芽研究「西欧古代と中世の文学史における連結点としてラテン語詩人クラウディアヌス」に採用された。一方で、勤務先から特別研究期間を認められ、フィレンツェ大学の招聘を得て、在外研究を科研費採用期間の二年目に行なえることが決まっており、フィレンツェ大学の推薦状によりラウレンツィアーナ図書館での重要写本閲覧が許される状況を実現することができた。

また、古代、中世を考える上で、歴史の舞台となったイタリア諸都市や、その遺産を実見できる遺跡、考古学博物館、美術館、教会を訪れることが可能な環境を得る見込みがある状況だった。

以上の状況を踏まえて、科研費の挑戦的萌芽研究「西欧古代と中世の文学史における連結点としてラテン語詩人クラウディアヌス」に採用され、その補助金を利用することにより、重要写本、絶版書籍の閲覧、資料収集、現地調査を行ない、テキストの精査と先行研究の整理から、全作品に関しては難しいにしても、クラウディアヌスの個々の作品の意義を明らかにし、この詩人が文学史の中でも、特に性格が全く異なるように見える古代と中世の重要な連結点であることを、少しずつでも明らかにして行きたいと考えていた。

### 2. 研究の目的

古代後期の宮廷詩人クラウディアヌス・クラウディアヌスを古典文学の伝統の集成者と位置づけ、彼以後、彼と同主題（祝婚歌、物語詩など）に取り組んだキリスト教人たち（特に、シドニウス・アポリナリス、ドラコンティウス、フォルトゥナトゥス）への影響を明らかにし、古典古代からキリスト教中世への文学的伝統の継承と発展において、結節点としての役割を果たしたクラウディアヌスの文学史における重要性を明らかにする。

### 3. 研究の方法

クラウディアヌスの全作品を「政治的・軍事的作品群」、「物語的叙事詩」、「小品群」の3つに分け、それぞれの作品を精査する。

クラウディウス以前の古典文学において、特にクラウディウスに影響を与えたと考えられるウェルギリウス、オウィディウス、セネカ、スタティウスのクラウディアヌスへの影響を整理する。

クラウディアヌスの「物語的叙事詩」である未完の『プロセルピナの誘拐』に見られる叙事詩的伝統を理解するために、ホメロス、ヘシオドス、アポロニオス・ロディオス、シリウス・イタリクス、ウアレリウス・フラックスの諸作品に見られる、特に寓意的表現に注目しながら分析を行なう。

クラウディウス以前もしくは同時代を生き、異教的伝統を伝えるアウソニウス、キリスト教詩人パウリヌス、プルデンティウスの諸作品とクラウディアヌスの作品を比較する。クラウディアヌス以後の古代末期キリスト教詩人シドニウス、ドラコンティウス、アポリナリスの諸作品におけるクラウディアヌスの影響を調査する。

本研究2年目に、勤務先の特別研究期間に、フィレンツェ大学の訪問教授に採用されたので、その地の利を活かして可能な限り実地調査を行ない、ラウレンツィアーナ図書館で、関係の写本を閲覧する。

研究書、学術論文、注釈書を渉猟して、先行研究を整理し、自身の知見、論点の独自な点を明らかにし、諸家の批判を仰ぎ、自説を確度の高いものとしていく。

#### 4. 研究成果

本研究の期間中に完結したビュデ叢書（ベル・レットル叢書）のクラウディアヌス著作集と、トイブナー叢書から出されたが、しばらく入手不能だった J.B.ホール校訂のクラウディアヌス作品集、およびイタリアで複数出版されていて、品切れ、絶版になっていてクラウディアヌス作品の注解書、研究書をフィレンツェ滞在中に入手することができた。

これらの書籍に取り上げられているが、真作性については否定されることが多い、伝クラウディアヌス『ラウレンティウスとフロリダの祝婚歌』にはキリスト教的要素が見られ、婚礼スピーチについてまとめられた修辞学者メナンドロス作と考えられている論考とも親和性が高く、クラウディアヌスの真作でないとしても、彼以後の時代の文学愛好者が一部でもクラウディアヌスの作品と考えた意味を考察する意義があると思われた。この研究成果は、「伝クラウディアヌス『ラウレンティウスとフロリダの祝婚歌』の真作性について」と言う論文にまとめられ、掲載雑誌も決まっているが、秋の締め切り、発刊が年度末なので、未発表の状態である。

『ラウレンティウスとフロリダの祝婚歌』は決して上手な作品とは言えず、クラウディアヌスはその短い生涯で達成した完成度を考えると、彼の作品とは考えにくいだが、一方で、これも確定が難しいが、仮にクラウディアヌスにとってラテン語が習得言語であれば、何らかの形でその詩才を磨き、権力者にその利用価値を認められていく過程で、習作的に制作され、文学伝統に理解のある階層（元老院議員をはじめとする権力の周辺にいて、学者や文人が周囲にいた人々）の興味を引き、詩人としての成長が期待され、当時の水準としては将来抜きん出た作品を書いて、特定の人物の権力者の正当性を文学的に表現してくれる、宣伝に資すると考えられたとすれば、権力者およびその周辺の人物が、この作品もしくは、これに類する習作的作品に注目したのではないかと考えられる。

この作品に見られる、序歌部分のウェルギリウスへの言及、作品全体に見られるウェルギリウスを初めとする古典詩人への引喩は上記の経過を推測させるし、作品に述べられた花婿、花嫁の家柄、教育、経歴などもその考えを補強する。特に花婿ラウレンティウスの法廷弁論家としての経歴と卓越性に関しては、この祝婚歌自体が修辭的であることと相まって、この作品を書くことによって、特定の階層の人々の注目を集めようとしたことが伺える。

テオドシウス帝が既に過去の人であり、ホノリウス帝が年少の人物であったことを考えると、クラウディアヌスの詩才に注目し、自己の宣伝に資すると考えた人物は将軍スティリコ以外には考えられず、それは現存するクラウディアヌスの作品におけるスティリコへの賞賛、スティリコの敵対者たちへの否定的評価からも容易に推測できる。一方で、『ラウレンティウスとフロリダの祝婚歌』の真作性に多くの多くの先行研究が否定的な理由として、テキスト伝承の不明確さ、ラテン詩としての晦渋さ、完成度の低さとともに、詩人の賞賛にも関わらず、花婿ラウレンティウスの法廷弁論家としての、あるいはその先にあったと思われる政治家としての経歴、スティリコとの関係が歴史の中に浮き彫りにならないことが挙げられる。

古代文学のほとんどは、中世の写本によって現在に伝えられており、作家の実在性、作品の真作性を確定することが難しい場合が少なくないが、クラウディアヌスの場合は、多くの中世写本が残っていることに加えて、近い年代の後世の作家に影響を与えていること、顕彰碑文が現存すること、同時代の傑出したキリスト教思想家アウグスティヌスの代表的著作に言及があることによって、その実在性は保証される。また、その作品に見られるスティリコ、彼の妻でテオドシウス帝の養女セレナとの関係から、それらの同時代に位置付けることができる。

しかし、残念ながら、花婿ラウレンティウスに関しては、現在の所、史実の中に確定的に位置づけることはできず、当然ながらスティリコとの関係も明確にすることはできない。現時点では、この作品をクラウディアヌスの真作として、彼の重要性を論ずる材料にすることはできない。

しかし、テキスト伝承の点からも、登場人物の実在性からもクラウディアヌスの真作と認められる作品が『パラディウスとケレリナの祝婚歌』であり、先に分類した三つの作品群の中の「小品群」に入れられている。これを『ラウレンティウスとフロリダの祝婚歌』と比較対照すると、ラウレンティウス祝婚歌が古典の隠喩と、弁論家メナンドロスを想定させる様式性に縛られているのに対し、神話的物語や牧歌的ヴィジョンを取り入れることによって遥かに優れた文学性を備え、傑出した詩人であるクラウディアヌスの代表作とは言えないが、重要な作品の一つであると結論づけることはできる。この作品に関して分析を行なったのが、論文「クラウディアヌス・クラウディアヌス『パラディウスとケレリナの祝婚歌』 牧歌的ヴィジョンをめぐって」であり、早稲田大学比較文学研究室発行の『比較文学年誌』に公表された。

しかし、この時点で、補遺にラウレンティウス祝婚歌を収めたシャルレ校訂の『クラウ

ディアヌス作品集』IV (21018) は交歓されておらず、やはりこれを補遺に収録したホルの『クラウディアヌス全作品』(1985) は絶版で関係図書館でも閲覧できず、ビアンキーニ校訂・注解のクラウディアヌス『祝婚歌集』(2004) の入手も、2017年の在伊を待たなければならなかった。以前からホルツマンの『後期古代ラテン文学における祝婚歌』(2004) (2007年の『西洋古典学研究』に宮城の書評) によって、その存在と概要は知っていたが、ラウレンティウス祝婚歌の本格的考察は、ホールとビアンキーニを入手した2017年とシャルレが公刊された2018年を待たなければならなかった。

そもそも祝婚歌の伝統研究から始まったクラウディアヌスへの関心であったが、科研費申請時の意図と、その時点での研究計画では、クラウディアヌスの祝婚歌研究は既に終わり、これを前提に、より重要と思われた政治的・軍事的作品群、物語叙事詩に関心を向けたものであった。これは、当時、これらを含むクラウディアヌスの全作品の翻訳者に指名され、当然その準備のために、これらの諸作品の精読、研究は必須であったことにもよるが、もともと、祝婚歌・牧歌研究と悲劇研究を中心にしてきたため、おろそかになりがちで、巨視的な文学史的研究を経ずにクラウディアヌスと言う詩人の全貌を知ることではできないと考えたからであった。

そうした研究も今回の期間中に進められ、先行研究であるウェア『クラウディアヌスのローマの叙事詩伝統』(2012) (『西洋古典学研究』に宮城の書評) に示唆を得て、クラウディアヌスの政治的・軍事的作品群には、当然ながら、テオドシウス、ホノリウス、ステイリコへの賞賛があり、わけても作品制作時に既に過去の人物で、ホノリウス、ステイリコにとっては権威の背景であったテオドシウスの功業を歌い上げた箇所、ウェルギリウス『アエネイス』第六巻における、冥界を訪ねたアエネアスへの、父アンキセスの亡霊による助言の中に、ローマの世界支配理念が語られている詩句が意識されているなど、同時代の政治的、軍事的な出来事を扱っていながら、建国伝説を歌い上げた古典叙事詩の技法を取り入れるなど、多くの点を理解することでできた。

さらに、物語叙事詩『プロセルピナの誘拐』は反対に神話を扱いながら、最終的には、ウェルギリウス以来のローマ叙事詩の伝統である寓喩的手法により、やはり同時代の歴史に対する引喩になっているのではないかと考えるに至った。残念ながら、これらに関して、まだ公表は行われていないが、順次、今回の研究成果として学術雑誌に公表して行く。

こうした中、2018年に資料がそろったこともあり、再びクラウディアヌスにおける祝婚歌の重要性に思いが至った。カトゥッルス、セネカ、スタティウス、アウソニウスなど先行するラテン祝婚歌の伝統を踏まえながら、彼が小編『パラディウスとケレリナの祝婚歌』と大作『ホノリウスとマリアの祝婚歌』とそれに付随する小詩群を作成したことは詩人の経歴の点からも、前者はローマ軍の中で重要な地位を持つ一族の婚礼を祝しており、後者は皇帝とその後見人の娘の婚礼を歌ったものなので、詩人がその地位を上昇させ、宮廷詩人としての地位を確立していったことを伺わせる。

さらに、真作性には疑義があるとは言え、何らかの形でクラウディアヌスに関係づけられて来た『ラウレンティウスとフロリダの祝婚歌』を精査する機会があり、2019年に発表予定の論文にまとめたことにより、クラウディアヌスの真作とされる2つの祝婚歌の意味もまたより明確になった。ラウレンティウス祝婚歌はクラウディアヌスの作品ではないとしても、古典の引喩と婚礼演説の様式に縛られたこのレヴェルの祝婚歌を書いて、貴頭の注目を集め、詩人としての地位を高めていったことは、クラウディアヌスに関して十分に推測される。

そうした経緯を経て、彼は西ローマでも重要な一族の婚礼を寿ぐ歌の作成を任され、さらに政治的、軍事的作品群において、テオドシウスの後継者たちの信頼を得、皇帝の祝婚歌作成を任される地位を勝ち得て行ったという推定は許されるであろう。彼はホノリウス祝婚歌において300年前のスタティウスが、おそらくカトゥッルス64番やテオクリトス18番に示唆を得て、神話的、物語要素を現実の婚礼に応用して搜索した物語祝婚歌の手法を復活させ、この形式がシドニウス・アポリナリス、ドラコンティウス、フォルトゥナトゥスと言う直近の後進にあたるキリスト教詩人たちに引き継がれた。

またホノリウス祝婚歌に付随する小詩群で多様な韻律形式を用いて、ローマの抒情詩の伝統を復活させ、三つに分類した作品群のうちの小品群とともに、黄昏の西ローマの文芸復興を齎した。当時の彼への評価は、少しおおげさではあっても、ホメロス、ウェルギリウスに比定する顕彰碑文の文面からもうかがえる。

以上、この期間のクラウディアヌス研究を踏まえて、今回、不十分にしか研究を行なうことができなかった、クラウディアヌス以後のキリスト教詩人たち、またクラウディアヌスの先人の中でも焦点の当たりにくいスタティウスに関する研究を深め、今回や予定にも含めていなかったネメシアヌスなどの牧歌詩人との関係も浮き彫りにして、クラウディアヌスの文学史上の位置について、今回きわめて不十分にしか着手できていない、少なくとも出発点には立つことができた中世への展望を実現して行きたい。

そのためには、ラテン語、民族語で作成された中世文学の研究が必須だが、クラウディ

アヌスの後進であるキリスト教人たち、さらに後世のアラーヌスに至るラテン語作家から精査を進めて行きたい。イタリアでの在外研究で、中世の重要性は認識しているが、広範囲であっては手に負えないので、ともかく古典的伝統の継承という点に注目して今後の研究を進め、順次成果を発表して行きたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①宮城徳也「セネカの悲劇『メデア』の第一合唱隊歌と祝婚歌の伝統」、WASEDA RILAS JOURNAL、査読有、No.4（早稲田大学総合人文科学研究センター）、pp.169-181、2016

②宮城徳也「クラウディウス・クラウディアヌス『パッラディウスとケレリナの祝婚歌』牧歌的ヴィジョンをめぐって」、『比較文学年誌』（早稲田大学比較文学研究室）52、査読無、pp.16-33、2016

〔学会発表〕（計 1 件）

①宮城徳也「スピネッロ・アレティーノとトスカーナの諸都市」都市と美術研究所、第11回研究会、2018年11月15日

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.f.waseda.jp/tokuyam/fir.index.htm>

## 6. 研究組織

(1) 研究分担者 無し

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者 無し

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。